

氏名	木川 明彦
学位の種類	博士（事業構想学）
学位記番号	第25号
学位授与年月日	平成31年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学位論文題目	中小企業における会計処理の効率化 - 高度化する電子会計手法の評価 -
論文審査委員	主査 糟谷 昌志 副査 富樫 敦, 岡田 匡令

論文の要旨

中小企業向けの会計ソフトウェアに自動仕訳を行うとする機能は、これまで数多く開発されてきた。しかし、中小企業向けの会計ソフトウェアが発売されて、半世紀以上経た現在でも会計の自動仕訳（以下、自動仕訳）の完成形は、確立されていないと考えられる。しかしながら、第3次 AI ブームの最中、会計業務は直に AI に代替される仕事の代表格と評されることも少なくない。こうした議論は、特に第2次 AI ブーム後の 1990 年代の windows 定着時に盛り上がりを見せたように、繰り返されてきた論議でもある。今回の AI ブームには、AI によって中小企業向けの会計ソフトウェア単体でも、自動仕訳が確立されるのではないかという期待が高まっている。進展の目覚ましい情報産業で、半世紀以上も挑戦され続け、自動仕訳が完成形に至らない要因は、情報技術の問題よりも会計処理に係る慣習や法規等に内在すると仮定した。本研究では、下記の 6 つの要因が、自動仕訳の障壁であると仮説を立て、検証することを試みた。

- ① 企業会計原則と実務処理の選択肢の多様性
- ② 電子帳簿保存法等の要件の厳格性
- ③ 原始証憑等の規格の不統一性やデジタル化の遅れと税法の制約性
- ④ 取引データの電磁化とデータ交換のインフラ確立の途上性と低利用度の問題
- ⑤ 確立されている自動仕訳では人の行う仕訳入力より効率性・正確性・経済性から劣る
- ⑥ 中小企業の情報システムは部分統合の方が完全統合より優位性が高い

本研究では、中小企業の会計担当者の事実上の不在等、導入や運用の物理的・能力的課題、それに伴う会計実務教育の課題についても触れることとした。

本研究では、上記の仮説の障壁を超えない限り、第3次 AI ブームでも自動仕訳の完成形は成立しないと結論付けた。

なお、本研究が示す研究意義は、半世紀ほど続いている中小企業における会計処理の効率化という実務課題に対し、学際的なアプローチから、解決すべき課題を提示することにより、AI をはじめとした情報技術を有効に活用できる条件を提示したことである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章では、研究背景・研究目的・研究意義・研究手法を述べている。

第1章では、企業会計原則と実務処理の選択肢の多様性から、会計ソフトウェアの初期設定の複雑性を検討した。「経理自由の原則」が存在し、相対真実こそが企業会計原則の本質である。このことから、会計ソフトウェアの初期設定する画一的な自動仕訳では、多くの企業にマッチせず、膨大な初期設定や新規の取引での追加設定が必要であ

り、自動仕訳された仕訳が適正であるかの確認は、現状 AI では不可能であり、このため AI のみの完成形はほど遠いと分析された。また、一定レベルの自動化が可能であると考えられたが、現段階では FinTech での通帳やカード情報の連携までが効率的と考えられた。

第 2 章では、わが国の会計実務・会計ソフトウェアの特性を整理した。日本には、確定決算主義があり、企業向けの会計ソフトウェアは税務会計まで網羅することが求められる。そのため、税務の有利選択は必須であり、通達行政に対応する自動仕訳のアップデートの提供等、これらに自動仕訳の対応は現状困難であると考えられた。

第 3 章では、中小企業の経営環境を整理した。第 3 次 AI ブーム下での自動仕訳は、FinTech と連動した自動仕訳が一里塚と思われる。しかし、中小企業のインターネットバンクの利用度は低く、キャッシュレス決済も進まない現状では、会計ソフトウェアが進化してもその能力が発揮できない現状である。また、会計事務員が事実上不在であったり、兼担や会計能力を有しない者が担当している等、自動仕訳化を担保する細やかな設定変更対応する組織力が保てなかったりする。自動仕訳や AI 化を担保する人材確保の困難性は、今後も大きな課題と位置付けられ、会計も学校教育段階での AI 対応が望まれると考えられた。

第 4 章では、会計業務の自動化の変遷を追うことにより、高度情報化しつつなお、完全自動化が達成できなかった要因を考察した。制度や人材不足により、紙の原始証憑からの OCR 等による自動読み取り方式の実務上の困難性等、これまでの自動仕訳化の取り組みと実務対応で完成形を見られなかった要因を探り、根本的な問題点を提示した。また、中小企業の多くは、税理士等の職業会計人に記帳代行を依頼していることが多く、自社で会計処理するより経済性・正確性が高いため、相当安価で信頼性が高くないと今後も業務変革の認識が芽生えないとも考えられた。この点、自動仕訳を強く求めているのは、実質処理をしている職業会計人と考えられ、税理士等の選択行動が中小企業の会計処理の効率化の指針になると考えられた。

第 5 章では、まとめとして、第 3 次 AI ブーム下での会計ソフトウェアは、従来と何が違うか明らかにした。AI や FinTech、高度情報ネットワークは、自動仕訳の本質的課題を根本から解決する可能性を秘めている。情報ネットワークを中心とした技術革新・ペーパーレスに対応した法改正・キャッシュレスに対応した商慣習・AI 時代の業務が理解できる人材教育があつてこそ、自動仕訳の完成形が見られるとして、AI 化だけでは当面達成は困難であると結論付けた。

終章では、本研究の概要を整理した。

審査結果の要旨

本研究は、情報技術の進展により、半世紀にわたり研究・開発し続けられてきた中小企業会計実務における「自動仕訳」が確立されない理由を情報技術だけではなく、法規や商慣習等に要因があるとして、定性的な研究を行っている。

論文は、序章と第 1～5 章、終章で構成されており、各章の概要は以下の通りである。

序章では、本研究の目的とその根拠となる背景について整理した上で、仮説の設定を行うとともに、研究の手法と手順を提示している。

第 1 章では、会計制度と会計ソフトウェアのマッチング分析を行っている。第 1 節では、企業会計原則の一般原則から実務での会計処理と AI でのビッグデータや機械的学習とでは、根本的な性質が異なるため完全な仕訳の自動化は困難であることを確認している。第 2 節では、現状で自動仕訳の完成形が可能と考えられる範囲について考察が行われている。

第 2 章は、日本の会計実務の特徴と会計ソフトウェアに求められる役割について、分析を

行っている。第 1 節では、会計の本来持つ役割について、意思決定の判断材料の提供としての情報論を述べている。それらを前提として、第 2 節では、会計を取り巻く異なる目的の法の存在について記述されている。情報提供・債権者保護・投資家保護・税額計算等、異なる法の要請に対し、実務簿記は複雑な処理を要求されており、特に会計の憲法と称される企業会計原則を超えて、税法の存在が影響を与えており、通達行政の複雑かつ変化の激しい制度対応の困難性を指摘している。第 3 節では、電子帳簿保存法との影響を沿革から分析している。

第 3 章では、中小企業の会計実務に対応する経営環境について、分析を行っている。第 1 節では、会計に対応する人材不足について統計等を用いり分析を行っている。第 2 節では、中小企業におけるインターネットバンキングの利用率等、自動仕訳の前提条件をクリアしていない現状を分析している。第 3 節では、AI 時代に対応すべき人材対応を中小企業は自社で育成することが困難であることを前提に、学校教育での対応を言及している。

第 4 章では、半世紀に渡り中小企業において、自動仕訳が確立できなかった点を分析している。第 1 節では、関連する自計化の動きについて述べている。第 2 節では、自動仕訳について変遷とその限界を述べている。第 3 節では、紙の原始証憑からの自動仕訳の物理的・情報的限界を指摘している。第 4 節では、税理士等の職業会計人の存在とその影響を述べている。記帳代行の優位性と税理士のニーズに応えた会計ソフトウェア会社の優位性についても分析を行っている。

第 5 章では、これまでの分析から今後の展望を述べている。第 1 節では、これまでの分析を小括している。特にペーパーレスに対応する技術・制度・商慣習・人材教育対応が、自動仕訳の完成形の条件としている。第 2 節では、技術対応を中心に中小企業の改善点と展望を述べている。第 3 節では、制度対応と商慣習を中心に決済や原始証憑の電子化対応の必要性を述べている。第 4 節では、AI 化で風化する業務と発生する業務について触れ、その人材教育に対して述べている。

終章では、本研究をまとめ、中小企業における会計処理の効率化と自動仕訳、会計ソフトウェアを利用した会計処理を電子会計手法として、進展への提言を行っている。

なお、論文を構成する核となる部分は、日本経営実務研究学会及び日本ビジネスマネジメント学会の掲載論文（査読論文）に基づいている。

以上のように、事業構想学の会計実学として、会計学の境界領域を射程に入れ、価値創造と実現可能性の検証を行い、その問題点と改善点を明らかにしたものであり、博士論文として十分な新規性・独創性・有効性を有している。また、中小企業会計の発展に資する研究であり、事業構想学における博士の学位にふさわしい論文として評価できる。